

## 〈3〉 サウジアラビアの現在地

—イランとの関係修復、ガザ紛争、シリア政権崩壊を受けて—

日本エネルギー経済研究所 中東研究センター 主任研究員 近藤 重人

### 1. はじめに

中東は大きな政治変動の最中にあり、そのほぼ中心に位置するサウジアラビアもその影響を受けつつも、概ねうまく国のかじ取りを行ってきた。2023年3月のイランとの国交回復合意は「宿敵」だったイランを「敵」でなくすための戦略的な動きであり、概ね現在までうまく推移している。ただ2023年10月7日に勃発したガザ紛争は中東を再びかく乱させ、サウジアラビアもそれまで温めていたイスラエルとの国交正常化交渉の継続を断念させるに至った。さらに2024年12月8日にはシリアでアサド政権が崩壊し、中東の秩序に変化が訪れている。本稿ではこうした地域情勢がサウジアラビアに与えた影響と、サウジアラビアが地域情勢に与えようとしている影響の双方について考察したい。

### 2. 順調に進むイランとの関係強化

#### 2.1. イエメン情勢への影響

サウジアラビアは2023年3月にイランと国交回復で合意した際、秘密条項でイランがイエメン問題でサウジアラビアに譲歩したと広く考えられてきた。というのもサウジアラビアがこの時までイランとの国交回復に踏み出さなかったのは、イランがサウジアラビアに対して敵対的な姿勢を取ってきたイエメンのフーシー派の支援を継続してきたからで

あった。従って、この北京での合意の秘密条項でイランはフーシー派に対する武器支援の停止に応じたものと筆者も考えていた。

しかし、確かにイランはイエメン問題で譲歩したが、それはフーシー派への武器供与を止めるという形ではなく、同派に対してサウジアラビアを攻撃しないよう要請するという形であったらしいことが、その後の推移を見ていくと徐々に明らかになっていった。というのも、イエメンのフーシー派は2023年3月のサウジ・イラン合意後も武器不足に陥った様子はなく、むしろ軍事パレードなどで新たにイランによって供与されたと見られるミサイルなどの武器も披露し、むしろ軍力は増強されたからである。つまり、サウジアラビアはイエメンのフーシー派の攻撃「能力」が増強されるのは止むを得ないと諦め、代わりにその能力を自国に対して向けるような「意図」を持たないよう、イランにも協力してもらおうとしたと考えられるのである。

このようにサウジアラビアは武器供与の停止に比べたらはるかに弱い譲歩しか得られなかったため、心からイランとの国交回復を歓迎しているという雰囲気ではなかった。もちろん国交回復は徐々にではあるが順調に進み、2023年8月までに両国は互いに大使を派遣し、またサウジアラビアの財務相がイランに投資を行う可能性があるとリップサービスすることはあったが、この限定的な譲歩にサウジアラビアは内心では不満を抱えていたのだろう。両国首脳

の相互訪問も実現せず、外相レベルでも互いに先に自国を訪問するよう要請するなど面子のぶつかり合いになり、結局会合はいつも何千キロも離れた中国の北京などで行われた。つまり国交回復合意が成立してもしばらくは「冷たい平和」が続いたのである。

## 2.2. イラン大統領のアラブ・イスラーム・サミットへの参加

そうした「冷たい平和」が、完全には言えなくても「暖かい平和」に変化したきっかけとなったのが、皮肉にも2023年10月以降のガザ紛争であり、イスラエルによる激しいガザ地区への攻撃は、イスラーム世界を結束させる力学を生じさせた。というのも、それまで面子の張り合いから実現していなかったサウジアラビアとイランの間の首脳レベルの往来が、この紛争によって実現したからである。サウジアラビアは2023年11月11日にアラブ連盟とイスラーム協力機構の合同サミットをリヤードで開催し、それにイランのライースイー大統領が出席した。これは「パレスチナの大義」のもとに両国が真に結束を深めた瞬間であった。サミットはガザ地区への侵略を直ぐに中止することなどを要求する決議を採択し、アラブ・イスラーム世界が一つになった瞬間でもあった。

しかし、サミットを主催したサウジアラビアの状況はそんなに悠長なものではなかった。むしろこのサミットを成功裏に開催できない限り、極端に言えば同国はアラブ・イスラーム世界で村八分にされる恐れさえあったのである。サウジアラビアは後述するように、10月7日のパレスチナのハマースによるイスラエルに対する大規模攻撃まで、イスラエルとの国交正常化交渉を進めていた。こうした中で、特にイスラエルに対して強硬な姿勢を示してきたイラン、アルジェリアなどの国々、フーシー派のような非国家主体から、サウジアラビアに対する非難の声が上がりかねないような状況にあったのである。サウジアラビアはそうした向かい風を予想し、むしろ先手を打ってアラブ・イスラーム世界を糾合するようなサミットの開催を各国に呼びかけ、イランの強硬派などにサウジアラビアを批判させる隙を与えず、むしろ同国の大統領がサウジアラビアを訪問という果実を手にするようになった。

この見事なまでの迅速な立場の切り替えが可能

だったのは、サウジアラビア外務省の尽力が大きかった。もともとサウジアラビア外務省はガザ紛争発生前から、極右政治家2名を擁する「史上最も右寄り」と言われるイスラエルのネタニヤフ政権の、エルサレムにあるイスラームの聖地アルアクサーモスクへの「侵略」といった「蛮行」に度々懸念を表明してきたが、後述する通りムハンマド皇太子がイスラエルとの接近に前向きであったことから、そうしたイスラエル非難の姿勢がサウジアラビアの主流の政策になることはなかった。それがガザ紛争の発生でムハンマド皇太子が方針を改めてこの外務省の立場を活用することにしたため、速やかにイスラエルに対する強硬姿勢に切り替えることができたのである。

## 2.3. イラン・イスラエル武力衝突でイランに配慮

ガザ紛争は2024年4月以降に戦線がイラン・イスラエル間にまで拡大していった。4月1日にイスラエルは在シリア・イラン大使館領事部を空爆、軍事施設でもない外交施設が公然と攻撃されたことに衝撃が走った。この攻撃の正確な背景は不明だが、イスラエルはイランがウクライナ戦争でシリアへの関与を減らしたロシアに代わってシリア内で勢力を拡大させていること、そしてパレスチナのヨルダン川西岸に武器を密輸していることなどを根拠に、イラン関係施設への攻撃を決定したという見方がある。この公然たる外交施設に対する攻撃に対して、イランは「断固たる報復」を行うと宣言し、その結果4月14日にイランはドローンやミサイルを発射した。この時イランは事前にサウジアラビアやUAEに攻撃の規模やタイミングについて説明したと報道されたが、それはあえて米国の友好国であるこれらの国々にこうした情報を共有したことで、イランがイスラエルによる更なる報復攻撃を避けようとしたのではないかと考えられている。

サウジアラビアはこの時は興味深いことに米国やイスラエルに配慮する姿勢を示した。後述するように米国は2024年1月から再びサウジアラビア・イスラエル間の国交正常化交渉を促し、それを「アメ」にしてイスラエルにガザ紛争の停止を働きかけていた。強硬なイスラエル政府も、サウジアラビアとの国交正常化という果実を得られるのであれば、ガザ紛争について多少譲歩しても良いと考えるのではな

いかという期待があったからである。サウジアラビアとしても、仮にイスラエルがパレスチナでの戦闘を止めれば、ガザ紛争を終結に導いた国としてアラブ・イスラーム世界に対して喧伝できることが可能だと考えた。また、イスラエルとの国交正常化と引き換えに米国と安全保障協力を深められるとも考えた。

こうした状況だったため、この2024年4月のイラン・イスラエル間の衝突でサウジアラビアはむしろ米国との連携に重きを置いたと見られる。イスラエルのメディア「KAN」は、サウジアラビアが4月14日のイランの攻撃をイスラエルなどが撃墜するのを支援したと報じている。サウジアラビアはそれを否定しているが、イランからの攻撃に対してイスラエルと湾岸諸国が共同で防空体制を構築するという発想は、米国が2021年にイスラエルを湾岸諸国などと同じ米中央軍の管轄に入れて以来、促してきたことである。そこでサウジアラビアが米国に秋波を送る意味で、この時にイスラエルの防空に協力した可能性は十分にあったと考えられる。

いずれにせよその後も事態は悪化し、2024年7月にはイスラエルがイランでハマースの指導者ハニーヤを殺害するという事件が発生、9月にはレバノンの親イラン民兵ヒズブラーの指導者ナスララーとイラン革命防衛隊ニールフルシャーン准将を殺害するという攻勢に出た。これに対してイランは10月1日にイスラエルにほとんどが迎撃されたものの大規模な攻撃をしかけ、その報復としてイスラエルは10月26日にイランに対して報復攻撃し、軍事施設などに被害を与えた。

この2024年10月のイランとイスラエルの間の軍事的な応酬でサウジアラビアは翻ってイランにかなり配慮する姿勢を示した。これには2つ理由があり、1つはサウジアラビアが望みをかけていたイスラエルの戦闘を止めさせるための2024年前半に展開された米国による外交努力が全く実を結ばなかったことが明らかになり、再びイランとの関係強化の重要性が増したことがある。もう1つは、4月の応酬がイランによる対イスラエル攻撃に注目が集まったのに対し、10月の応酬はイスラエルによる対イラン攻撃に注目が集まったという点である。10月にイスラエルはイランの石油施設への攻撃も検討しているという観測が早くから見られ、それはサウジアラビア

にとって由々しきことであった。なぜなら、イランの革命防衛隊の中にはサウジアラビアがイスラエルと協力していると考える者も出かねず、彼らが自らの石油施設を攻撃された報復として、サウジアラビアの石油施設を攻撃するという連鎖反応が生じかねないと懸念したのである。

こうした懸念から、サウジアラビアは10月の危機の最中にイランと認識のずれが生じないように意思疎通を密に行った。たとえばイランによる攻撃の2日後の10月3日にはカタールで「アジア協力対話サミット」というスポーツ外交をテーマにした会合が開催されたが、その傍らでサウジアラビアのフェイサル外相がイランのペゼシュキアーン大統領と会談し、そこで外相はサウジアラビアがイランの敵ではないことを説明したと思われる。他方、10月9日に今度はイランのアラウグチー外相がサウジアラビアを訪問し、フェイサル外相だけでなくムハンマド皇太子とも会談した。イランとしては、来たるイスラエルの攻撃の際に、領空の使用を認めないようサウジアラビアに要請する意図があったと思われる。結果的に10月26日のイスラエルの攻撃対象にそもそも石油施設は含まれず、またイスラエルの戦闘機はシリアとイラクの上空を飛行したと見られるため、両国の懸念は幸いにも杞憂に終わったが、両国がイスラエルの攻撃を前に結束を示した瞬間であった。

#### 2.4. イエメンのフーシー派にも配慮

サウジアラビアはイランから攻撃されないように細心の注意を払ったが、そうした配慮はイランが支援するイエメンのフーシー派にも向けられた。前述の通りサウジアラビアは国交正常化合意の結果、イランはフーシー派に対してサウジアラビアへの攻撃を唆さないようになったと考えられるが、それでも同派が未来永劫サウジアラビアを再び攻撃しないという保証はなかった。むしろ2022年4月から継続してきた戦闘のない両者の関係があわや崩壊かと思われる瀬戸際にまで立たされることになった。それが2024年7月のフーシー派の指導者アブドゥルマリク・フーシーのサウジアラビアに対する警告である。同年4月にサウジアラビアが支援するイエメン南部に拠点を置くイエメン正統政府が国内の銀行に対し、フーシー派の支配する北部サナアから撤退しなければ制裁を課すと発表し、その結果として同派の